



「お前、俺をナメてるのか?!」
～Are you licking me?

田川 剛





初めてこの映えある「百万遍」に寄稿させていただくというのに、いきなり「お前、俺をナメてるのか?!」は失礼が過ぎるだろうか、、、。とはいえ、それくらいの虚勢を張らなければ、私のような小物がこの場には立ってられない。百万遍では学食に忍び込んでたまにランチをいただいた思い出はあるが、所詮、河内の南端にある大学で芸事を少しばかり学ぶも一年半で自らをもって卒業した身である。諸兄からすれば、「バカの壁」が何十にも立ちはだかる向こうに私は立っている。しかしバカといえどもそれなりに歳は取っているので、それなりに考えることも少しはある。大阪で生まれ育ち、20年以上世界を飛び回り、今は丹波篠山の地で土を耕したり、宿を営んだり、英語の駄文を綴る日々。その中で見たこと、感じたことをちらりと書かせていただこうと思う。



私の現在の本業は「全国通訳案内士」である。外国人の方が日本へ来られた際に外国語でご案内する役目だ。もっとわかりやすくいうと、日本へ旅行に来られた外国人のためのツアーガイドだ。あまり知られていないが、実はこの「全国通訳案内士」は語学に関する唯一の国家資格である（語学の資格といえば英検やTOEICなどをよく耳に思うと思うが、それらはいずれも民間の認定資格）。

もちろん、このコロナがはびこるご時世（2022年7月現在）、外国人のガイドやアテンドをする仕事はほとんどない。そこで、英語ができるのなら、ということで英訳の仕事がちょこちょこ入ってくる。歴史施設や博物館の説明文やパンフレット、観光案内、イベント告知、プレゼン資料、来たるべきインバウンド復活に向けてのツアー企画書、などなど。一度は自治会費を滞納しているイギリス人への督促状を英訳してほしいと、近隣の自治会長さんからのご依頼もあった（結構ですよ、とお断りしたが謝金として3000円いただいた。笑）。

「全国通訳案内士」の看板を挙げているとはいえ、私はネイティブスピーカーではないし、まだまだ知らない表現や単語もたくさんある。かつては辞書が何よりも頼りの綱だったが、現在はなんといっても翻訳アプリである。Google翻訳、DeepL、ViceTraなど、さまざまな翻訳アプリが簡単に、それも無料で使うことができる。これは本当にありがたい。翻訳にかかる時間を劇的に短縮できる。もちろんまだまだ開発途上であり、おかしい訳文をひねり出してくることもあるのだが、それをもう一度自分の目でチェックすることにより精度を上げることができる。

私の手順としては、

- ①日本語文を翻訳アプリに入れる
- ②出てくる英文をチェックする
- ③自分で考える訳文と比較し、おかしいなと思う箇所を手直しする
- ④その英文を今度は逆にアプリを使って日本語訳にする

⑤他のアプリでも訳してみる

⑥以上を何度か繰り返し、これでよし、と思うところまで行ったら、ネイティブにチェックを依頼する
という流れだ。

スマホやタブレットにアプリを入れておき、話しかけると選んだ言語に翻訳して音声が行れるものもある。自動翻訳機である。観光庁の主導で開発された31言語対応の「VoiceTra」というアプリがあり、インバウンド対応に遅れの見られる地方都市の観光現場での使用が想定されている。実際、観光庁が全国通訳案内士を講師としてあちこちの地方都市へ派遣し、その使い方の研修を行なっている。かくいう私も講師として何度か教える側に立ったのだが、これがなかなか優秀で使い勝手も悪くない。



先ほど翻訳アプリの恩恵により、自分の仕事がラクになったと述べた。翻訳アプリの精度も完璧とはいえないまでも、十分に実用レベルであり、またAIの活躍でデータの蓄積をすることにより1日1日進化しているという。が、いや待て待て、このままでは自分の出番自体がなくなってしまうのではないか。それどころか、おそらくはあと10年もすれば、翻訳家や通訳といった仕事は世の中からほぼ消えてしまうのではないか。

ところが、である。現在の日本において、その不安を吹き飛ばすに十分な根拠が身の回りには溢れていた。それが「お前、俺をナメてるのか?!」なのだ。

「お前、俺をナメてるのか?!」を翻訳アプリにかけると、表題のように「Are you licking me?」と出る。lickという単語はまさに「舐める」という動詞である。「飴を舐める」「指を舐める」のように、動作としての「舐める」である。しかし、ここでの「俺をナメる」は、俺をペロペロしているわけではない。「お前は俺をバカにしているのか?」という意味のスラングである。

先日、何人かで食事をした際、19歳の大学生がその中にいた。彼女が翻訳ソフトを使い、同席していた台湾人に話しかけているのだが、ことごとく意味が通じない。「日本の公園の鳩は人間をナメてるから逃げないよ」「今に見てろ、と思わない?」。これらは、広辞苑にも載っているごく一般的な慣用句である。それでもまだAIは理解できていない。もちろん、あと数年のうちに少なくとも広辞苑に載っている慣用句はAIにもインプットされ、正しい訳文を作ることができるようになるだろう。だが、問題はそこではない。機械の作った訳文が通じなかった際に、彼女は違う言い方で日本語の文章を作ることができない。つまり、日本語力の問題なのだ。

「人間をナメてる」を「人間をバカにしてる」と言い換えることができない。「今に見てろ」の用法はわかっているけど、「いつか見返してやる」と別の言葉にできない。辞書に載っているような慣用句でもそうなのだから、いわゆる若者言葉（すみません、私も歯が立たないどころか

例すら思い浮かびません) を、翻訳アプリが理解できるようなきちんとした日本語に置き換えることはきっとできないだろう。



これは彼女だけの問題ではない。そして若者だけの問題でもない。

私は通訳案内士を名乗るようになり、博物館や寺社仏閣などの説明文を少し注意深く読むようになった。またそのような文章を翻訳する機会も増えた。そして気付いたのは、なんと文法的に間違いが多く、理路整然とせず、一文が長く、そして専門家にしか理解できない言葉を使った説明文、解説文の多いことか。私にとって翻訳作業の第一歩は、難解で意味不明で主語と述語がマッチしない文章を、小学生にも理解できる「やさしい日本語」に書き直すことである。

それはお前の頭のレベルの問題だ、と言われるかもしれない。では、もっと下界へ話を降ろそう。テレビのバラエティ番組を見ていると、やたらと意味不明瞭な言葉が出てきたり、擬音語・擬態語が多かったり、仲間内だけでしか通じない話題を公共の電波に乗せているように感じる。英語に訳すのは難しい、、、というよりも訳す価値もない駄文ならぬ駄言がとても多い。おそらく話している当人ですら、わかりやすい日本語に置き換えることはできないだろう。

国会の質疑応答はどうだ。元々、質問に対して答えになっていない答弁が繰り返されるどころへ加えて、「サステイナブル」「トランジション」、本来の意味と合ってるのかどうかわからない英語が随所に散りばめられている。MNP（マイナンバーポータビリティ）などの3文字略語も次から次へと生み出される。

全世代を通して曖昧模糊とした言葉を我々日本人は使っている。なんとなくわかったフリをして日々の会話は成り立っていると、どれほどの人が認識しているだろう。

翻訳アプリにいい仕事をしてもらうためには、正しく、そしてわかりやすい日本語を使わなければならない。ほぼ単一民族単一言語の島国の中で、相手の表情や空気を読むことによって成り立っている日常的な会話を、客観的視点を持って「やさしい日本語」に翻訳しなければならない。

そう、翻訳アプリを使いこなすには、日本語力が問われるのだ。

そして、悲しいかな、多くの国民はその日本語力を持っていない、、、今のところ。



おそらくそのことに気付き始めるのは若者だと思う。世界中の人々とビジネスをしたり、オンラインゲームを通じて言葉を交わしたり、SNSで自分の身の回りの出来事を英語で発信したりするうちに、翻訳アプリを使うことが日常になる。自分の日本語がうまく英語に訳されない

経験を重ねるうちに、「どうして？」という疑問が湧き上がる。果たして、正しい日本語を使わなければ翻訳アプリは自分の味方になってくれないと気付く。この気が高校生・中学生、いや小学生の間に広がれば、国語のテストの平均点は飛躍的に上がり、ひいては国民の平均的な日本語力アップにつながる。

さらに言えば、国語力が上がることによってその他の学力も引き上げられると予想する。算数の文章問題の意味が理解できない生徒が少なからずいるという問題はかなり前から指摘されている。文章の意味を正しく理解し要旨を掴む力がつけば、外国語の習得にも大きなアドバンテージとなる。

では翻訳アプリを物心ついた時から使い始める、今現在5歳以下の子供たち、翻訳アプリネイティブはどうだろう。彼らは言語習得の過程とともに、翻訳アプリを使い始める。そして正しい日本語でなければアプリが認識してくれないことを身をもって学ぶ。結果、日本語力が自然と身に付くのではないか、と私は考えている。



「全然おもしろい」に違和感を持つ世代は若者の言葉の乱れを指摘する。しかし、「全然＋肯定」文は明治から昭和初期にかけて、正しい文法であった。文豪・夏目漱石の「坊ちゃん」の中にも「生徒が全然悪いです」という一節がある。

言葉の乱れは世の常である。しかしそれは、乱れなのか、揺らぎなのか、回帰なのか、進化なのか、大きな時間軸を持たなければ答えは見えてこない。

これまで日本語は、外国と隔絶された環境の中で、同じ価値観を土台として持つ者同士の意思疎通手段として進化、いや深化してきた。今、もはや国際化という言葉が古臭く感じるほどに文化的国境がなくなってきている中で、異文化とつながるツールとして、翻訳アプリを通した日本語の次のフェーズが始まっている。



「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」

～井上ひさし